

①

シロツメクサ

白詰草 しろつめくさ マメ科

幸せは踏まれて育つ

シロツメクサはクローバーの別名でおなじみである。子どものころ、原っぱに座り込んでクローバーの花の首飾りや冠を作って遊んだ女性の方も多いただろう。

宮沢賢治の童話『ポラーノの広場』では、夕暮れにシロツメクサの花のなかに見える番号を順番にたどっていくと「ポラーノの広場」に着くことができる。幻想的な物語を演出するシロツメクサの花をよく見ると、小さな花が集まって一つの花を形成している。その小さな花が下から順番に咲いていくので、一つの花のなかにこれから咲く花と咲いている花、咲き終わった花が混在しているのだ。咲き終わった花が垂れ下がってできる陰った部分には確かに数字が見えるようにも思える。心の美しい人はきつとその数字をたどっていくこともできるのだろう。

シロツメクサの花が小さな花を順番に咲かせていくのは、長い期間、花を目立たせるためである。一つの小さな花の寿命は短くても、これから咲くつぼみも、終わってしまった花も集まっているから、全体としては一つの大きな花が咲き続けているように見え

る。こうして花を目立たせてミツバチを呼び寄せさせるのだ。

ミツバチが花に止まり、後ろ足で花びらを押し下げると蜜のありかへの入口が開かれる。この花びらを押し下げることのできる力と、蜜を得るしくみを理解する知恵を持つ虫でなければ蜜にありつくことはできない。力の弱い小さなハチやアブは蜜を吸うことができないのだ。シロツメクサの出した難題をクリアできた者だけが蜜を飲むことを許されているのである。

結婚相手の条件に「高身長、高学歴、高収入」の三高を挙げる独身女性が多いといわれている。シロツメクサもハードルを高くすることによって、より優れたパートナーを選んでいるのである。

こうして得たパートナーには期待以上の効果もある。苦勞して蜜を手に入れたパートナーは、むやみに浮気をしないのである。苦勞してシロツメクサの蜜の入手法を覚えたミツバチは、同じしくみで手に入る蜜を独占したくなる。だから、シロツメクサの花ばかりをまわって蜜を集めるようになるのだ。シロツメクサにとって、これは非常に都合がいい。つぎからつぎへいろいろな種類の花をまわる浮気者では、シロツメクサのようにで花粉を受け渡すことが難しい。ところが、シロツメクサの花だけをまわってくれば、それだけ受粉の効率がよくなるのである。



4

66



⑤

ミツバチをはじめとしたハナバチの仲間をパートナーに選ぶ花は多い。それらの花は、蜜のありかを巧みに隠して、ハナバチの力と知恵を試しているのだ。それらの花の多くは蜜のありかや操作部分に、ヒントになる目印をつけている。まるで記号のボタンを押すと餌が出てくるチンパンジーの学習機械のようなものだ。

ところで、シロツメクサは本来、三つ葉だが、ときどき四つ葉のものがある。これが幸せのシンボルとして有名な四つ葉のクローバーである。セント・パトリックがクローバーの三葉を愛・希望・信仰の三位一体にたとえ、四枚目を幸福と説いたことに由来する。四つ葉のクローバーを持っていると恋がかなうといわれているので、押し葉にして大切に持っている人もいるだろう。

この四つ葉のクローバーがあらわれる原因の一つは、生長点が傷つけられることにあるともいわれている。たしかに四つ葉のクローバーは道端や運動場など、よく踏まれるところで見つかりやすい。幸せのシンボルはお花畑のなかにはないのだ。三高にこだわる世の女性たちに、本当の幸せとは踏まれて育つことをシロツメクサは語りかけているのかもしれない。

シロツメクサ *Trifolium repens* (マメ科 シャジクソウ属)

シロツメクサはヨーロッパ原産の帰化植物。クローバーとも呼ばれる。日本に渡来したのは江戸時代であり、花を乾燥してガラス器などの緩衝剤として詰め物にしたものから発芽したものであるという。地表直下から地表を匍匐する地下茎があり、所々から葉や花を付ける。3つの小葉を付けるのが普通であるが、4~6枚の小葉をつけることもあり「幸せを呼ぶ四つ葉のクローバー」として親しまれている。

葉は柔らかいが、踏みつけや刈り取りには結構強く、地表近くに張り巡らした茎から迅速に再生してくる。マメ科であるので根には根粒が形成され、空中窒素の固定能力があるのでグラウンドのような荒れ地にも生育している。牧草として利用されてきたが、緑化にもよく利用される。下の画像は、モモ畑の地被としての利用である。密生させて他の雑草の繁茂を防ぐとともに、空気中の窒素を固定させる働きもあって、一挙両得という目論見なのではないかと思う。





名前	シロツメクサ(クローバー)
科名	マメ科
学名	Trifolium repens L.
花期	春～夏

「よつ葉のクローバー」で有名な野草です。

くきは地面をはうようにのび、そこから花や葉の長い柄(え)が立ち上がるようになっています。

柄の先に白い花がたくさん集まって、玉のような形をつくっています。

シロツメクサはカラスノエンドウなどと同じマメ科の野草です。マメ科といえば、花の形に特徴があります(蝶形花)。見慣れたシロツメクサの花も、そんなことを知ってから、あらためてよく見てみると・・・あらま、そんなことになっていたの！



←カラスノエンドウの花(蝶形花)

名前の
いわれ

昔、外国から日本にガラス製品などを運ぶとき、荷物がこわれないように、この草をクッションのかわりに箱の中につめたことから、「詰め草」とよばれる。

シロツメクサの冠の作り方 by いとうきよの



春になるとシロツメクサの花がたくさん咲いてとてもきれいです。

冠以外にも、小さく作ってブレスレットにしたり、がんばってネックレスに挑戦してみるのもいいかもしれません。

アイテム

シロツメクサ

たくさん

● 特長

シロツメクサは株の基部から匍匐茎(ランナー)を多数発生させてマット状に広がります。匍匐茎は各節からひげ根を発生させて長さ50cm(ほど)に伸長します。

匍匐茎は地面を匍匐して広がるため、刈り込みによるダメージを受けにくく、また仮に切断されても各節から生じたひげ根によって独立した生育が可能となります。

シロツメクサは根部及び匍匐茎の貯蔵養分に富み、再生力が強いことから刈り込みに対して極めて強く、刈り込み回数を増やすだけでは一時的な抑草は可能でも根絶することはできません。一度芝地に混入して繁殖してしまうと耕種的防除のみによる根絶は困難になります。

シロツメクサはマメ科植物であるため、根粒菌との共生により空気中の窒素を固定して利用することが可能です。そのため芝草に比べて窒素要求性は低く、窒素肥料の不足した芝地でも繁殖することが可能です。

しろつめくさ No.087



名 前 シロツメクサ
白詰草

別 名 クローバー

科 名 マメ科

学 名 *Trifolium repens*

花 期 4～7月

草 丈 15-30cm

生育地 道端、野原

仲 間 アカツメクサ、コメツブツメクサ

その他 帰化植物、食用可、薬用効能有

撮影地 豊橋市牛川町

※画像はクリックで拡大します。

メ モ

ヨーロッパ・北アフリカ生まれの帰化植物です。シロツメクサの名前は江戸時代にオランダからガラスの器を運んだとき、割れないように詰め物として入っていたからです。クローバーという名前も知られています。はじめは牧草として栽培されていたものが野生化して広がりました。若い葉、花が食用になります。下の画像は花のアップです。小さな花が集まっていることが分かります。



四ツ葉(よつば)のクローバー、発見♪♪

同じ茎からは、ふつうの三ツ葉の葉っぱが出ていた(左側)。

四ツ葉は突然変異で生じたと思われる。とにかく珍しい♪

(三ツ葉に対して、四ツ葉は1/10000ぐらいの確率で現れるらしい)

白詰草 (しろつめくさ)

(クローバー、馬肥 (うまごやし))

(Clover, Trefoil)

(四ツ葉、五ツ葉も掲載♪)



(花)



太い茎の白詰草（この茎がすごかった♪）





四ツ葉のクローバー



こちらダブルの四ツ葉♪



たまに「二ツ葉」を見かける





